

氏名（本籍）	Mahshid Baniani		
学位の種類	博士（デザイン学）		
学位記番号	博甲第	7415	号
学位授与年月	平成 27 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	A Comparative Study on Interior Color Preference (インテリア色彩嗜好に関する研究)		
主査	筑波大学教授	博士（デザイン学）	五十嵐浩也
副査	筑波大学教授		鵜沢隆
副査	筑波大学准教授	博士（工学）	山本早里
副査	早稲田大学教授	博士（人間科学）	齋藤美穂

論文の内容の要旨

(目的)

インテリア色彩のうち、最も個人の嗜好が現れやすい寝室の壁面色を対象として、個人の嗜好の要因を明らかにすることを目的としている。著者の既往研究において寝室壁面の嗜好色の国際比較調査を行った結果、日本人が白色を好む傾向が顕著であったこと、他の先行研究において性別や年齢などが嗜好色に及ぼす影響は明らかにされているものの、教育や居住環境など社会的な要因の影響は明らかにされていないことが本研究の主な背景である。

(対象と方法)

第 1 章および第 3 章における文献調査と、第 2 章および第 4 章における被験者を用いた描画実験とアンケート調査によって国際比較研究を行った。インテリア色彩の嗜好色のうち寝室の嗜好色を主な対象とし、参考として外壁の嗜好色も調査した。

第 1 章ではインテリアに限らず色彩嗜好に関する先行研究を分析し、国際的な嗜好色の傾向と、嗜好色の要因に関して整理し、第 2 章ではインテリアの嗜好色として主に寝室の壁面の嗜好色について実験とアンケートを通じて影響を及ぼす要因を明らかにした。第 3 章では創造的な教育に関する先行研究について文献調査を行い検討した。第 4 章では第 2 章と同様に実験とアンケート調査を通じて、主に芸術に関する教育と嗜好色との関係を明らかにした。

描画実験は、寝室の線画と 24 色の色鉛筆を被験者に与え、自分の寝室として好ましい色彩に描画してもらったものである。アンケート調査は、第 2 章では今までの居住環境として都市および住居の環境、子どもの頃の芸術教育や色彩教育に関する経験を聞き、第 4 章ではこの芸術教育について、具体的な内

容を示して時間数と経験を詳しく聞いた。また、サンプル写真を見ることが描画に与える影響を明らかにするため、被験者を色のついた寝室のサンプル写真を見せるグループと、白黒のサンプル写真を見せるグループとの2群に分け、写真を見る前後に寝室の描画をさせて色数を比較した。

寝室の描画に用いられた色彩を24色の色鉛筆と対照して色数と色名を抽出し、アンケート調査の回答と比較して分散分析およびT検定を行い、影響を検討した。被験者は第2章では日本人115人、イラン人94人、日本に住む外国人92人であった。第4章では日本人124人、日本に住む外国人136人であり、それぞれ主に大学生であった。

(結果と考察)

第2章における描画実験の結果、寝室の描画に用いられた色数は、イラン人、外国人、日本人の順に多かったが、アンケート調査との比較分析を行ったところ、国籍に関わらず、芸術に関する教育の時間数が多い被験者ほど色数が多い傾向がみられた(1%有意)。住宅環境には差が見られず、都市環境、本人の芸術に関する専攻の有無と両親の芸術に関する専門の影響がみられた(5%有意)。

第4章においても同様に描画における色数との比較を行ったところ、同様に外国人が用いる色数が日本人の色数よりも多かった。さらに芸術教育の経験に関するアンケート調査結果と比較したところ、芸術に関するグループワークを行った経験と芸術に関する学校や塾へ通ったことがある経験に関して、色数の差が顕著に表れた(1%有意)。そのほか、想像を自由にさせる教育活動や、創造的な活動、サンプルを見せる教育、美術館での鑑賞教育、色鉛筆の色数を多く使う教育、両親が芸術に関する専攻であること、などに有意差が見られた(5%有意)。実験では、寝室のサンプル写真を見せてその事前事後の描画の色数に影響を及ぼすかについても検討したところ、カラーのサンプルを見せた被験者のグループでは事後で色数が有意に増加し、白黒のサンプルを見せた被験者のグループでは事後で有意に色数が減少した(1%有意)。

この結果、国籍を問わず、子どもの頃に芸術教育を受けた時間数が寝室の色彩を描画する色数に影響を与えていることが明らかになった。これは居住した住宅環境や都市環境よりも強い影響があったことが分かった。また、サンプル画像の色彩の有無が、描画の色数に影響を与えていたことは、大人になってからの芸術教育の可能性を示唆していると考えられた。

審査の結果の要旨

(批評)

著者は嗜好色に関する先行研究を数多くの文献調査によって整理し、また多くの被験者を用いた国際比較実験を行って嗜好色の要因を一部明らかにした。得られた結果は国際的な学会誌にも掲載され、価値が高いと認められる。

平成27年1月14日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士(デザイン学)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。